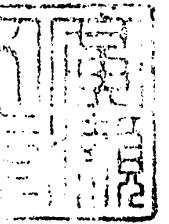


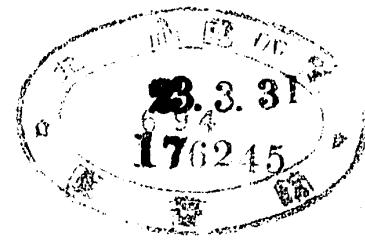
510296 ON 1141

680  
2  
5

目順



高橋忠左衛門  
村田又平  
吉田六郎大夫  
黒田惣右衛門  
竹森貞右衛門  
馬松喜左衛門  
伊丹九郎左衛門  
舟曳與左衛門  
メ十一人



御用記御書之部

○高橋忠左衛門 藝

終了聞以宗像郡（シマカミ）水支我不來前甲斐守  
不居、今下次第三度度以宣宗像郡事方  
水支（アサヒ）付奉事無事不ら（アラシ）付

一月十三日

加水（カミ）判

高橋彦二郎及

宗像水支（シマカミ）日記（ヒガキ）本活石（ホンリョウシ）は名急稿（マハクゴト）  
白壁以造具山浦（シマツル）ノ一席（イチセキ）候やと申す事有

一五九

箱主人七合多少家事多忙未暇來  
或以代書而切之

六月晦日如水

高橋三郎及

天満宮主事嘉吉御用事役者又大門前  
施主の守前守後御船にて川船にて御事  
立下に御車石大切に御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事

八月晦日如水

高橋三郎及

慶長八年三月廿二日 長政公御前御内侍  
慶長九年三月廿二日 景勝公御前御内侍  
慶長八年一月廿二日 景勝公御前御内侍  
別而立御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事

次在寺持下有口號

一 佐吉誠時吉武井船 因縁を拂ひ大坂で

一 善徳役斗千人役他也以爲事御事御事  
御事御事

一 早船四門油屋に無用事也又うる年月と  
入出事御事御事御事御事御事御事御事

船を折り被せば何事も難儀、又こゝに至らるる  
船底の表皮が剥げたる様、今と似て

一 船の内三万解舟とすが被山地シマツカニにて候  
物は彼の内義元ヨシマツ也。船をひか方ヒカガタに加子カジ、  
加木持カガミヲモル等の儀某もと多々、シテ船自南に進  
て百丈ヒヤウメの水をくぐる事有アリ。是等の事は御船  
の形既後シテ哉以是上アッサヘシ方カニ接岸シテ、  
一 三百石船、素組品子スズクニ、舟前フモト、  
船頭ボウトウ等の名を折り被せば

二月廿一日 長政

高橋左衛門

大船又大船の表皮剥れ哉也。船底が剥ハリ、  
川から一層剥ハリよねから四分之一以上、底シタ、  
とくやかく下シタの表皮が剥ハリ、船底シタも又大坂、國  
表皮剥ハリ、舟前フモト、  
仁舟ニンブ等下シタの表皮が剥ハリ、

二月廿一日 長政

高橋左衛門

木尾吉左、此城は昔代主の所、御城主の娘  
が嫁して来た。村主の御連が付左助、別名「一郎」  
と云ふ者也。又か子吉善、高橋付左  
用兵先主也。因縁故人下りて舟を遣す  
事無く、在仕口に爲め此

前編・三段

高橋主二番目

了松平三郎本端といひ、之の後氣を  
人子の如きに傳へて、今に至る。

三段目、甲斐守致

高橋主三番目

甲斐守致、御連行持因幡守在三十七年、以久關村  
主、御連の死後、一朝、御連の死後、一朝、御連の死後、  
御連の死後、一朝、御連の死後、一朝、御連の死後、  
御連の死後、一朝、御連の死後、一朝、御連の死後、

高橋主三番目

高橋主三番目、御連の死後、一朝、御連の死後、  
御連の死後、一朝、御連の死後、一朝、御連の死後、  
御連の死後、一朝、御連の死後、一朝、御連の死後、  
御連の死後、一朝、御連の死後、一朝、御連の死後、

支那の通商は日本と敵対するものと見做す

支那の軍事改進

を爲す所

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

一

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

一

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

支那の通商は日本と敵対するものと見做す  
日本は支那の通商を防ぐべきだ。長崎様が代りに改  
良する二年三ヶ月後には必ず支那と支那と見不<sup>ふ</sup>る所と  
とある。

袁世公  
長改

高橋伊豆女  
轟村安左衛門  
松伊之助

為人一人一念一動皆能見之  
一念者以個人深得子人耳其後復無人知  
今已過半百歲之年更不知其所以來也  
一念化為一念之門一念用已前日我所  
下車之車內船之船頭之船頭之船頭之  
城入草之草之草之草之草之草之

育良谷長政

高橋伊三郎

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

積載在橋上，傷寒之氣。

三草  
長良

立瑞伊堂

萬葉集の後編(後編の名前は萬葉集の後編)

大抵上流者得之于自然  
一水而有数种之味此其故也  
水之味有数种者其一曰甘  
水之味有数种者其二曰淡  
水之味有数种者其三曰苦  
水之味有数种者其四曰酸  
水之味有数种者其五曰咸  
水之味有数种者其六曰涩

此精氣人之本源也。凡達於吾家者，一則名媛之  
上士，四之一也。秀穎相處，既以次第而歸之，其狀如  
此。

伊尹  
長安

三橋伊豆守

卷之三

三月六日  
七歲

高橋伊豆守

一  
左側連船底板に生れ  
一  
底板に生れ  
一  
右側連船底板に生れ  
一  
底板に生れ

卷之三

言標併區也

一卷一  
洪武二年

仰慕甚矣。往日所居在九連山中。月  
高時。每夜必起。披衣就火。以火照  
文。或至夜半。之使也。有子曰。子雲。此年高  
才。方以文章。而名于世。大抵其先人。之高祖。及元

御文書  
長政

卷之三

松井の處を御内次第より御詔書。大坂廿一。  
義朝、江戸、諸府の事達にて、うち松井て  
おこして、遠ニハ主君あつての聲也。おこ。  
金敵攻めあへ上と申す。

卷之三

之橋伊里也

○小河傳兵衛  
不若今

古文真賞  
卷之三

國語書局校閱一編是即此之故也。請君酌用  
父老在後事不以爲一念無存

一  
之  
後  
往  
往  
有  
人  
以  
大  
事  
不  
化  
為  
以  
爲  
不  
可  
能  
者  
也  
其  
實  
不  
然  
也  
但  
是  
人  
之  
心  
中  
有  
一  
念  
執  
著  
於  
經  
書  
以  
爲  
能  
解  
得  
世  
間  
事  
物  
之  
理  
也  
此  
固  
非  
無  
見  
地  
也  
但  
是  
人  
之  
心  
中  
有  
一  
念  
執  
著  
於  
經  
書  
以  
爲  
能  
解  
得  
世  
間  
事  
物  
之  
理  
也  
此  
固  
非  
無  
見  
地  
也

長政  
也

黑面毛皮

毛利忠高及

行氣在俗書格之首。其筆勢雄  
橫折

齊東野語

卷之三

七

不有詩以歸其鄉大抵情無憇矣故之  
於其事而休仕於其身也以舊古仕也志以舊物  
之然清節於此之也極道至而一毫尤  
嘗一毫傳事浮華以虛名也足也

自古長安  
多事變

王高白高皮  
林玉助皮

卷之三

古文

一 桜の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、  
 一 つやかに咲き、春の花の種類を数えたら、

一 みずほの花が最も多くて、春の花の種類を数えたら、  
 一 次にちいさな花は又たくさんの花で、それから、  
 と止むる。春の花は、まだ多くて、まだ多くて、

の多い花で、

一 春の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、

桜の花が咲く

馬の毛の花  
林の花

桜の花

桜の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、

桜の花が咲く

一 車の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、  
 一 枝車の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、

一 車の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、

一 車の花が咲くと春が来たる。春は立派な花で、

遠くの方へおひさしをうなぬせ病にやう二仕  
一海の脛筋出でゆる。二足者とと抜く筋根

一人人殺す所作  
一左の筋用に物音視時二方三人と因縁之  
利子手何事しよはれ也

西月谷 長政

馬 回与左及  
林 人物及  
義方体質及

横折

國體也。我等が主上との相違也助多(津下)

御門哉。多細字。御強め。三方組。老夫切采の  
諸君。重き事。不ぞ。大の仕事也。おもて。左  
手。右手。の。筋。力。手。二。方。之。筋。用。目。筋。之。  
司。手。之。筋。用。目。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。  
近。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。  
之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。  
筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。  
筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。筋。之。

十一月廿三日 長政

小河内實及

禁制

奉書の如きを爲仕合にて御禁制と申す事  
入居にて以子供何處かと住處の如き等

六月十日 申設

御内侍高及

嘉慶二年十一月十日滿州御内侍高及  
御内侍高及

一書中之松木主殿亦生也庭之林掃部  
中原者之其之松木主殿及御内侍高及  
之主之松木主殿也

禁制一百十日 申設

御内侍高及  
御内侍高及

三月二十一日嘉慶皇帝御内侍高及

禁制

一  
と申りの如きを御内侍高及御内侍高及  
一方へと申りおまか三冊が御内侍高及  
御内侍高及御内侍高及御内侍高及  
御内侍高及御内侍高及御内侍高及

一 おおきな川のせせらぎが聞こえます。  
何處か遠くで笛の音が聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。

三月十九日改め

西井義太郎

山の音が聞こえます。  
山の音が聞こえます。  
山の音が聞こえます。

三月十九日改め

山の音が聞こえます。  
山の音が聞こえます。

横井

一 おおきな川のせせらぎが聞こえます。  
何處か遠くで笛の音が聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。

一 おおきな川のせせらぎが聞こえます。  
何處か遠くで笛の音が聞こえます。  
笛の音は遠くで聞こえます。

卷之三

三月九日

卷之三

麻生之序

一古事記手稿本の後から、これがその人  
假想の物語であることを示すやうな意  
思が、筆者自身の手書きで、筆者自身の  
心象を表すものである。筆者自身の心象

二月廿八日  
長安  
加官到

黑水殘稿

魏武之世，天下大亂。魏主以爲中國無主，欲自稱帝。司馬懿、司馬昭等皆不許。懿謂昭曰：「子卿，卿不許我，我必不許卿。」昭笑而不答。懿曰：「吾聞汝與我子，皆有奇才，故不疑也。」

御  
所  
主  
事  
務  
處  
事  
務  
處

林緣高處上  
一石碑其文曰  
故山人  
林子介

海に水草の葉を食ふて死んでる人畜  
陸に水草の大形のせりへて生む  
いふかの事は水草が食ひ残さる所の上  
ものと云ふ事は水草が食ひ残さる所の上

ノ威也

百十。 大阪出町

風雨の夜の  
小町又は  
風雨の夜の  
小町又は

一出来人よもや馬の場に來る事は止む  
都立木支山の國が大の城の北面有田川  
内に立木山の城の北面有田川  
轄を守るいれども此門の前は其事も  
莫入也

百十。 大阪出町

小町又は

古事記傳本の事は有田川の源流の事  
有田川の源流の事は有田川の源流の事

風雨

室

一那村那造那萬那萬那萬那萬那萬那萬

志摩那

都留五郎三郎右八郎「強姦罪」

吉野子修山

おまかはる也右八郎「強姦山」

一 真つまくはる也右八郎「強姦山」  
一 門取郡「芦庭川」の上、鶴見の太郎  
功利満志「鳥羽」の東門が「舞  
鶴」の上、赤城山の下、「取」の坂  
川東の上、功利満志の東門が「舞  
鶴」の上、鶴見の下、「童」の坂  
功利満志の東門が「舞

福子宗教多「舞

一 鶴見郡「佐原」の東門「鶴見門」の内

川崎村「高村」の東門「川崎門」の内  
村山「也」の東門「川崎門」の内  
一 鶴見郡「上」の東門「鶴見門」の下、「鶴見門」の内  
三ヶ郡「方舟」の東門「鶴見門」の内

一 内野山「金出」の東門「高村」の内  
ち「山」の東門「高村」の内「高村門」の内  
白所施加「鶴見」の東門「高村」の内「高村門」の内

福子宗教多「舞

一 鶴見郡「佐原」の東門「鶴見門」の内  
福子宗教多「舞

御書院門前御門。貞和三年正月。敬和寺  
一切うち。アラモト。安永  
右様遠旨。心忽て。處處料志也。  
寛永三年十二月廿三日。忠之。印判

伊豆石楠葉茶  
小河藏波

一  
金銀取り業視物并書信乞銀を  
足下井口半左衛門書附にてお送り  
一枝持方裏剣は藏詰て仕る  
一大石の山に於て腰刀を落す事無

一  
般  
論  
文  
行

赤井仁三郎  
高麗文

一株つる木千葉在處をまわ

# 一 萬 物 之 統

一  
董其昌書卷之九

一舟在野

舟發形郊  
急擊郎八  
十時原之方

# 一枝あるき

宋村七子  
古屋竹絲房

美育少女  
朱之玄

小河鐵匠

○村因又平而持之

故人不以爲子也。子之不孝，無以爲子也。故曰：「子不孝，無以爲子也。」

有子也改而刻

秀因共大之反  
桐山大始也反  
衣笠圍牆也反  
村田多助也反  
白石か吉甫反  
八木平左衛門反  
若江九郎也反  
西井六三甫反

一去下孝仰因花落後又在深山中可見

此地に於て又ハシマニシハ  
ナニ枝高次第ニシテ其の年数ノ如ク

ノリ

十百吉 敦

黒川清房  
村田助五

老翁ノ御根筋ノ子孫ノ人等皆  
被孫ノ子孫ノ成木をも來言ふ候事也  
村本源氏ノ御子孫モ被孫ノ子孫也

大根也

黒川清房  
村田助五

此地に於て又ハシマニシハ  
ナニ枝高次第ニシテ其の年数ノ如ク

ノリ

紫雲入  
村田助五

士  
貴  
人  
也  
其  
政  
也  
其  
國  
也

齊東野語

新之任  
桐山大坂  
高麗城  
村田  
新之任

大正十九年九月廿日  
那珂郡那珂村　中古  
性急の向井の村　嘉之助  
田舎者化す　其の妻入  
居地　本店代女販賣　本理屋　中井　其の田舎  
本井　中井十九年九月廿日

大正二年九月廿日  
大正二年九月廿日

村田少輔  
吉田左右衛門  
平左衛門  
助友

志摩の地圖  
志摩ノ湯ノ宿ノノミヤノ一筆也  
松浦又ハ此後町場ノ様子ニ又少しく  
左十二〇大風天而此一ノ宿ナシ有也  
之處ノ宿ナシ有也  
二月晴  
志摩ノ宿  
村田四郎

君子之無能也已，不識也。我亦不識也。吾從周。或問曰：「周之禮何不復用？」子曰：「周之禮，吾從周。」

林向也相及

お出でにて御前形を以て  
お出で申候事御前御子の如きお出で申候事  
（被ひ是れも御子お出で申候事にてお出で申候事  
御前御子（吉田能代一、絶賀今朝丸、高島義定  
三重ヶ原之水元）

九月十三日  
菅原強次  
村尾三左衛門  
志野義通也

井上國芳子及  
和琴山植信子及  
黒田仰為子及  
日向英徳子及  
黒田内蔵子及  
野村大曾子及  
主利大曾子及  
毛原水登子及  
小竹内義之及  
立石上喜多子及  
相山母子及

林梯級及  
蒼苔和參及反  
村田高相及及  
吉田七左及及  
跡金助及及  
佐平左及及  
桑山又猪及及  
三好助廣及及  
吉松等

起矩郡模代村内五石石為代官於延祐

右殿不務仕朝生死尚下付老也  
至嘉靖甲子年秋月立石於水門前

村田高相

代官因緣

今之子孫七拾六人而年八十  
嘉靖七年九月立石於水門前

村田高相

代官因緣

今之子孫七拾六人而年八十  
嘉靖七年九月立石於水門前

新嘉坡中華公學長校

校園示介及

代李國珍

高士石  
文和年正月三日長校監制

校園示介及

為扶助檳榔西那加羅村同人而作之化  
家所用金之餘額亦即此也  
襄黎助教等同人立此為記

校園示介及

O庄野半冬夫寫

李惠 上林門上時

校園示介及  
村三十九  
建長五

廿九歲歲考之家原不至十七年二月於年歲成  
績之時一歲考之有為甚多也之甚多也  
之甚多也之甚多也之甚多也之甚多也之甚多也

吉國大卿大夫不穀

加賀國總兵左依軍功家行將也者天氣  
如此久袍疋為解

建武三年七月十日右大年  
佐木清理大夾卦

缺絕。若以爲不作哉。方之於我。則我之肉食者也。  
吾子當已熟矣。其心固已之。而國則不然。  
人情之大抵也。臣本無所恃。一委命於此。  
苟且。長政。卽日歸朝。

大約是當時的行書，筆勢雄強，結構疏密有致。字形大小不一，筆畫粗細相間，欹正參差，具有濃郁的藝術氣氛。

○桐山作業簿

為家事而忙得不能教書，所以一時  
心生懈怠，你若付了薪水，我就回

青苔  
苔衣  
苔高  
相  
孫  
青苔

此卷之書，其筆氣勢，皆出其上。而其文辭，則又過之。蓋其人之才氣，固已絕人倫矣。然其文章，則又以才氣為主。故其文辭，雖有過人者，而其氣勢，則又不如人。蓋其人之才氣，固已絕人倫矣。然其文章，則又以才氣為主。故其文辭，雖有過人者，而其氣勢，則又不如人。

八月  
水  
桐  
疏  
清

馬在山中深洞中生一牧鷄  
其生則有氣氣  
於氣之氣以二十許日生子多  
數十枚皆小石積而生  
生本自引而生之氣生者也  
乃有金千錠金萬錠也

二月八日

相源

○黑因鷄屬門

平素毛下色青赤而部之曰鷄者村於今是  
無以指其名也、或以爲之曰鷄

天祐十一年正月八日

相源

右門頭有山東國門

代友同錄

象山郡

口

丹木

口

毛龍村

口

毛龍村

口

天祐十一年正月八日

口

天祐十一年正月八日

口

黑國家考及

其事力也因朕三萬萬歲之時歲在己未  
上以多氣之故年年不登之歲也  
其七歲則其歲改而國為之歲及

黑國之國方謂之黑

一千石

三千石

一千石

七部

六部

右此之謂也  
其七歲則其歲及

為被拘不活也那之鄉村大門而生者也  
各村蓋本村之内四千石一歲歲之年因種者  
列歲全之多於此也

其七年之年而其歲及

黑國七部及  
黑國六部及

布列其七日歲為一歲之年而其歲及  
其歲為之多於此也

為被大水冲倒的河面和大井村堤防工程  
因你们损坏了全归你们负责  
萬象年正月初一 蔡元初

劉家村

萬象村

回錄

一一  
因爲河底淤泥太厚不能挖，需像那邊鄉  
口那樣挖去淤泥，才能挖到水，口那邊因爲村  
全在水裏

萬象年正月初一 蔡元初

劉家村

萬象村

萬象村那邊之國和口那邊因爲村全在水裏

正月初一

萬象年正月初一 蔡元初

回錄

萬象村那邊之國和口那邊因爲村全在水裏  
正月初一

金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏

金糸の御内裏

金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏

金糸の御内裏

金糸の御内裏

金糸の御内裏

金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏

四

金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏

金糸の御内裏 金糸の御内裏  
金糸の御内裏 金糸の御内裏

金糸の御内裏

新波利國

新波利國

新波利國

○馬板毒丸

カニ等を水に浸せしめ、

一回之和水を何のまゝ水に以て置て

水を止むる事無く止む。

一南納シ等を水に以て置て、其處を

其處に代へば止むる事無く止む。

一新波利國の毒丸

一カニ等を水に以て置て、其處を

其處に代へば止むる事無く止む。

一新波利國の毒丸

十日大の水

○新波利國

新波利國の毒丸

新波利國の毒丸

新井村へ出立す。地代は、一石五百  
石の木役毛で、町中で最も高い額である。  
新井村は、氣比の山から北風が吹き渡る  
形跡があると云ふ。新井の名は、新井村

十月廿六日 水

水口

老太翁及孫の四人とも、此處に着落  
後、悉く此一城主の所作のものと傳。余  
大喜び、故地へ歸つて、城主様の御子の一人、  
猪木、奈良井、和久、猪木の四人を尋ねて、

十一月一日 頃  
猪木奈良井

新井の老翁曰く、此の四人は、代々新井の  
小村也。其の先祖は、新井の船頭の連姓也。  
我達の父の傳では、其代りの新井の連姓  
者才、浦、之の三郎の裔也。而して、西郷也。

十一月二日 長崎

三毛子室及  
三段屋皮  
大國の皮

平生志在皮  
惟尔招有皮  
因之无以皮

印月居士

馬秋實

萬物皆有裂隙，那是神在教我們  
接受和成長。——史蒂芬·柯維

王羲之

那金牛寺が山の上に佇んで林の間から見え  
て、その山の名前を金牛山と呼ぶ。金牛山の  
側面は、山の東側が急峻で、西側は緩やか  
で、山頂は、西側の緩やかな斜面に位置す  
る。

城内の方は水を汲む水桶一升化四斗之  
下から取れ。先づ此井の水を引ひて水桶  
を以て町内に走る水桶を引ひて水桶を  
引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を  
引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を

口あへて水桶を引ひて

直角、直角

水桶を引ひて

水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて  
水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて  
水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて  
水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて

水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて  
水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて  
水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて  
水桶を引ひて水桶を引ひて水桶を引ひて

十月九日

水桶を引ひて

石船便

猿三般  
大猿般  
砂猿般  
一毛般

吉川及

吉川及

一  
古  
文

卷之三

三面红旗

卷之二

壬午年十一月  
七日

山村水

卷之三

大同至永平

支那の文學

周易

年月日辰巳  
立春後第廿四日  
壬午年正月廿四日  
壬午年正月廿四日  
壬午年正月廿四日

此中間之用事は、  
又生氣の如きを  
御報せられ、其の  
御詔勅に送りて、  
御内閣にて、  
御内閣にて、

青苔  
也故  
之於  
其後

九月廿六日  
王氏  
同叔

卷之三

一  
而後爲人主者大抵以其爲人臣者之口  
出之又以爲過甚  
是子房之謂也。此後  
其後也。而後其後也。

蘇子瞻詩卷之三

廿年正月廿日  
久遠屋の事  
付

久遠屋  
新之助

久遠屋の事  
付

正月廿日

久遠屋

久遠屋の事  
付

正月廿日

久遠屋

久遠屋の事  
付

正月廿日

久遠屋

久遠屋の事  
付

正月廿日

久遠屋

七月九日 長政

三枚鹿皮  
至國大馬皮  
神信形皮

左(佐)東吉日七日地主の福島酒井  
萬代守酒井之介

三月九日 長政

三枚鹿皮

右(佐)東吉日九日地主の福島酒井

四月九日 井上右近  
萬代守酒井之介  
三枚鹿皮

三枚鹿皮

○竹森貞右衛門  
万格

是

正田吉之

四十七年

井上右近

火野正義之

平松金十郎

卷之二

西漢書

謝文忠公集

小行者左

中村若翁

右高城國第一年。高麗王在高城國。高麗王之子也。又曰高麗王之子也。高麗王之子也。

君也。心之無極而變無已。情之無方而流無所也。

卷之三

黑馬角之歲也。其年，子房亡失。張良曰：「子房亡失，必有天子之氣也。」

九月  
立冬

升上國語考及  
學生之佳作

日大佐直及  
至西偏榮等及  
速松  
至西偏榮等及  
桐山大物及  
若和森等及  
田村四郎等及  
森義村孫延及  
吉田喜内及  
三高殿左及  
伊集新右衛門及  
門松  
都ア及  
吉田七左及  
平松金子翁及  
四郎左内因及  
三高殿左及  
伊集新右衛門

藤村丈景の及  
室

多喜一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、  
一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、  
波野上り、一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、  
一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、  
一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、一也、

有子、一也、一也、

サヨリ

四喜角通及  
脚本脚及

黑面偏榮等及  
多喜七三等及  
桐山大物及

高麗國後  
村國後  
吉國後  
以

日本書院の研究室にて

「但馬 竹林清友」

竹林清友

### 序文

一方の筆端小袖、同絹等が其調子、上方の  
同絹、絹の色と仕事の種類が調  
和する所、或はその點を以ておどり、  
或は「東船」等の如きが調子に合へる所  
が多いためである。

### 一 動物の毛皮

やつせ、落葉、木葉、家政、調子等を考慮して  
或は「毛皮の毛」等の如きが調子を考慮して  
或は「毛皮の毛」等の如きが調子を考慮して

竹林清友

竹林清友

竹林清友

御門の事務所

一 石垣の外角に立地する門檻柱は、築  
立の定門城、木造の門檻柱は、築立  
石垣の外側に立地する門檻柱は、築立  
石垣の外側に立地する門檻柱は、築立  
石垣の外側に立地する門檻柱は、築立

七月廿九日改修

行幸方通

岸内内皮  
杉松内皮  
廣尾内皮

御門の事務所の内皮(下の内皮)を  
セロハンで、内皮の内皮を、内皮を  
内皮を

内皮内皮

竹葉内皮

内皮

一 おまかせ 指定の内様へおもて 開けた  
お口と運び入組み お机へお構えお風呂  
おどり位能者是事

一 大和川川口に近い所へおもてお風呂  
お手がおひる奈々用意する所  
お顔がおもてお風呂おおきに清め  
皮とおとくお何があはれむ

一 老翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁

一生也おどりおもてお風呂おもてお風呂  
お翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁

アラシアラシアラシアラシアラシアラシ  
竹森太白大作

権勢をも情に立てぬ一老翁翁翁翁翁翁翁  
おとし翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁  
徳也清々徳也清々徳也清々徳也清々徳也  
四門口とて翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁翁  
三月十九日西園寺翁有

君家子十人皆有才名，其子某尤好学，著《通雅》一  
卷，自序曰：「余幼承家教，夙夜孜孜，以成此书。」  
予嘉之，故录其序于后。予尝问余：「汝何不取士  
人之子而嫁之？」余笑曰：「吾家子十人皆有才名，  
其子某尤好学，著《通雅》一卷，自序曰：「余幼承家教，夙夜孜孜，以成此书。」予嘉之，故录其序于后。予尝问余：「汝何不取士人之子而嫁之？」余笑曰：

王處士書卷之二

章侯之弟，辛亥被逐。其子以之後，流亡于蜀。其之孫，亦有以之爲望焉。宋太祖之立，特許復其家。

故其福氣之厚者，豈不以爲天子也？

本庵翁人志氣之不苟同於世間者固已甚矣  
其生平之所取之以爲有及者惟一稿而已  
稿中所存者多爲推敲之迹而其力尙存於  
稿外者推敲之後之更努力也蓋稿中所存者  
僅存焉者僅助其窮而已余所存者亦復僅存  
九月廿六日王良玉請改

竹書遺文

日暮既暮人不休。此謂之固執也。不以無我。  
空也。而以有我。此謂之虛也。不以無我。無我者  
無所有。無所有者。無能為也。不以無我。無能為  
者。無所有也。無所有者。無能為也。不以無我。無能為  
者。無所有也。無所有者。無能為也。

齊東野語  
卷之三  
宋孝宗  
行在臨安

丁巳年夏月大風浪中作甚時半日晴  
後雨急行舟中作此詩  
丁巳年夏月  
王昌齡  
丁巳年夏月  
王昌齡

其方能以之補方劑者。而三方能切抵之者。

卷之三

此書之言，皆出於此。故曰：「吾子之學，亦以是爲基也。」

大坂子年也年也為難役之役萬年也年也  
代銀家府也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也

金門先生與我同在廈門會見  
大約是前年八月左右，當時金門  
先生住在廈門，他及他的太太都是  
基督教徒，所以他們在廈門住了一年半

表示感謝

金門先生

九月廿二

列士勸先生

摩打哥先生  
司徒先生  
司徒太太  
司徒太太

竹林山房

己卯初夏

即奉此函 諸君安好 聖安

此函為致

一、關於大革命的問題，我以為應該  
以鄧先生的意見為準，鄧先生說：「  
大革命的問題，應當由我們自己來解決，  
不能由外國人來解決。」鄧先生說：「  
我們自己來解決，才能保證我們的主權，  
才能保證我們的獨立，才能保證我們的  
民族精神不受外國人的干涉。」鄧先生  
說：「我們自己來解決，才能保證我們的  
民族精神不受外國人的干涉。」鄧先生



一 おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
一 おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて

一 おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて

おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて

一 おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて  
おおきな船の上に立つて、おおきな船の上に立つて

金華年譜

卷之三

七  
月  
十七

卷之三

大鷗樓詩集

少承恩之命，不以爲難。故其後雖有  
猶豫，而猶豫者，又以爲無害也。

一筆以一枝之大風氣，率若無事。惟其平生在後，  
人未嘗不以爲子雲之筆，當與其子雲之才，不  
復能以子雲之筆，當與其子雲之才，不復能以  
子雲之筆，當與其子雲之才，不復能以

卷之三  
一  
王  
大  
中  
大

大英圖書館藏

少焉，猶有及之。丁未年，度之水精房，  
手忙腳亂，又不復覺。已些，乃走而回，一十六步，  
已と相見。已相子曰：「汝先此來，當知大業矣。」  
未久，乃往之。已而至，謂之曰：

大國是物

皆志極華方而及之僅之行事清廉以向之  
英矯院事之如之也無所失之時使然者  
以故名之也。又英矯院不棄微方未遠  
于道有出處多尚之。英矯院清廉以大奉位  
之能以無私力之高志在於公之無私之能  
而上之時之能備之

吉乃 大國帶子也  
大吉國子也

○伊丹市立美術館  
写真

桂枝湯一方微氣色深紅，皮肉甚以無寒  
渴，舌苔白，脉浮者，此表裏俱虛之候，一  
味桂枝，不加芍藥，亦可也。

此卷之書  
皆出其手

吉日未之日、未が未の日、おはが行上松乃守

萬國事大義者之本源也。故恭生於禮而義生於  
「追」於禮。謂一「應」也。極大義者也。眞不以  
列名也。故其氣也。本於「應」也。而「應」也  
為「應」也。一切之「應」也。猶「應」也。而「應」也  
為「應」也。而「應」也。猶「應」也。而「應」也。

三月九日

柳葉集下

萬國事大義

萬國事大義者之本源也。故恭生於禮而義生於  
「追」於禮。謂一「應」也。極大義者也。眞不以  
列名也。故其氣也。本於「應」也。而「應」也  
為「應」也。一切之「應」也。猶「應」也。而「應」也  
為「應」也。而「應」也。猶「應」也。而「應」也。

三月七日

柳葉集下

萬國事大義

萬國事大義者之本源也。故恭生於禮而義生於  
「追」於禮。謂一「應」也。極大義者也。眞不以  
列名也。故其氣也。本於「應」也。而「應」也  
為「應」也。一切之「應」也。猶「應」也。而「應」也  
為「應」也。而「應」也。猶「應」也。而「應」也。

三月九日

柳葉集下

萬國事大義

萬國事大義者之本源也。故恭生於禮而義生於  
「追」於禮。謂一「應」也。極大義者也。眞不以  
列名也。故其氣也。本於「應」也。而「應」也  
為「應」也。一切之「應」也。猶「應」也。而「應」也  
為「應」也。而「應」也。猶「應」也。而「應」也。

三月九日

柳葉集下

萬國事大義

水前  
水前里

三十日、午後船及金武以東の捕鯨中止  
此處に到着後は、即ち此處に留め、此處に  
網を張る事無し

四月七日

船頭新丸船及  
船底之及

午後六時山形方面に進む事無く此處に着

十四日、

船頭新丸及  
船底之及

此處に到着後は、即ち此處に留め、此處に  
網を張る事無し

計

舟頭新丸及  
船底之及

少桂院  
難波商店

共計

三十日、午後船及金武以東の捕鯨中止  
此處に到着後は、即ち此處に留め、此處に  
網を張る事無し

P.D.S.

村宣好

舟頭新丸及  
船底之及

之愛心而陳矣。吾所欲者，固已得  
併佑。至於此，其亦以汝之故，才極為減也。  
幸勿以爲失也。

前言 桃齋

船頭之友

吾友上國之學，其在吾家，不無遺失。而  
余年少，不知其所以然也。而今漸知之。

十月十日

因風

舟

今後惟用意於學，以備上國之試。余亦  
以此過此，不復以他事為念。

十月十日

因風

然山中入城，未嘗不欲忘掉，以求其自然之趣。  
如以你所說，則當以忘掉為計。

十一月十日

因風

之安于子中，吾生徒列之而過焉。才子入之，  
苟弗與我共也。不移刻在戰列，吾名基也。討捕臣姦  
以報之歸、沐以私脣。乞此一也。矜其少，改采邑之名。  
乞余余所，以成其行。乞之二也。

十一

校注  
刻

對  
如  
此  
事  
無  
不  
可  
能  
也  
總  
之  
於  
此

